

■ CTIC は今年、創立 20 周年を迎えます！

CTIC は 1990 年、東京教区 100 周年事業として国際化する教会、社会に奉仕するセンターとして設立されて今年で 20 年を迎えます。ご支援、ご協力頂きました皆様に感謝申し上げます。下記のとおり、記念行事を予定致しております。多くの方のご参加をお待ち致しております。

・記念ミサ・祝賀会

2010 年 9 月 23 日（木・秋分の日）カトリック目黒教会

12:00 記念祝賀ミサ 司式：岡田武夫大司教、幸田和夫司教

13:30 祝賀会

・フィリピン人共同体による記念コンサート

2010 年 9 月 20 日（月、敬老の日）15:00～ カトリック目黒教会

■ インターナショナルデー中止のお知らせ

CTIC 設立と同時に毎年開催されてまいりました、インターナショナルデーですが、カテドラル構内で行われています工事等、諸事情で今年は中止になりました。開催を楽しみにされていた多くの方にお詫び申し上げます。



■ アグネスさん、宮本さんありがとうございました！

2000 年より、フィリピン人の司牧のため信徒宣教者として派遣されていましたが、アグネス・ガットパタンさんが任期満了でフィリピンに帰国されました。

2005 年より、専従職員として働いてきました宮本信也さんが退職することになりました。

宗教法人 カトリック東京大司教区 ARCHDIOCESE OF TOKYO

カトリック東京国際センター (CTIC)
Catholic Tokyo International Center

【運営委員長】岡田武夫 【所長】大原 猛

〒 141-0021 東京都品川区上大崎 4-6-22
カトリック目黒教会内

Tel (03)5759-1061 Fax 5759-1063
http://www.ctic.jp info@ctic.jp

* 賛助会へご協力下さい。

個人会員 《一口》3,000 円（年間）

団体会員 《一口》5,000 円（年間）

《郵便振替》00150-5-120640

カトリック東京国際センター賛助会

《銀行振込》みずほ銀行目黒支店

（普通）8010313

宗教法人カトリック東京大司教区

カトリック東京国際センター

代表役員岡田武夫

ポルトガル語のミサの後で 千葉・習志野教会



祖国に帰れば？

—昨年からの不況の中、失業した外国籍の人達に「祖国に帰れば？」という問いかけがなされる。20年近く日本で暮らし、日本で結婚し、日本で子どもを授かり、日本の公立学校に子どもを通わせ、日本で家や車を購入している人達に対しても「帰国」を促す言葉が浴びせられる。

1990年、多くの外国人の受け入れを開始した日本は、準備が不足していたために大混乱となった。そんなカオスの中で、官民国籍を問わず、多くの人々が「日本社会の多文化共生化」という理想を目指し、様々な工夫を凝らし努力して来た。そして、その実現に向けて蝸牛並の速度であっても、日本が成長していると信じていた。

しかし、昨今の「経済不況」のとてつもないパワーによって、これまで積み上げられてきたものが突き崩され、「外国籍人は外の人」という風潮に押し戻されようとしているような危機感を感じる。

CTIC 20周年を迎える今、初心に帰り、真の「多文化共生社会」実現のために再度挑戦を始める時なのかもしれない。

CTICスタッフ 大迫こずえ

カトリック東京教区が運営している外国人（移住者・難民・移動者）のための司牧・相談センターです。日本での生活に関する様々な相談を受け付けています。

相談日時：

月曜日～金曜日 10:00～17:00

相談言語：

日本語、英語、タガログ語
ポルトガル語、スペイン語
イタリア語

- 祖国に帰れば？
大迫こずえ 1
- ブラジル人共同体はいま
オルメス・ミラニ 2
- 移住者たちの声 4
- 難民緊急キャンペーンお礼 6
- 2009年会計報告 7
- お知らせ 8
 - ・ 20周年のお知らせ
 - ・ インターナショナルデー中止のお知らせ
 - ・ 人事

「私はたくさんの美しい夢を描いて日本に来たけれど、時間が経ってこれから自分と家族がどうなるのだろうかと不安で非常に心配しています」とマルコスさんは私に話した。彼は、妻と今ではティーンエイジャーになった二人の子どもと共に日本にいるブラジル人の移住労働者である。彼の言葉は深く私に響いた。殆どいつも幸せな笑顔をしていた人が、とても悲しそうにこれを話したからである。

私はマルコスさんの悲しみと悩みの原因を突き止めるために時間をとって、いくつかの出来事を思い返して話してもらった。はじめて家族と日本に着くや否や、彼も妻も働き始め、子供たちを学校にやらなければならなかった。一ヶ月ほど経った時、家族が共に過ごす時間がとても少ないことに気づいた。それぞれの自由な日が違っていたからである。

数ヶ月探し求めてやっと教会を見つけた。月に一度だけ日曜日にポルトガル語のミサがあるらしいとわかったが、その日で

はなかったので、次の日曜日に又家族でわくわくしながらミサに行った。教区司祭に自分たちを紹介して話を聞いてもらいたかったのである。ところがその神父は親切で善意の人であったが、ミサの言葉をポルトガル語で読むことができるだけで、話すことは出来なかった。マルコス一家は信仰の厚い人々だったので、来ていた他のブラジル人たちと一緒に共同体を作りたかった。その人たちは月に一度だけのポルトガル語ミサの週には仕事があって、ミサに出られないのだとわかった。

会話を続けているうちに、日本に居るブラジル人たちは、自分たちの言葉を話せるごく少数の神父にしか世話してもらえないことがわかった。宗派の違う他の教会では週3回以上開かれていて、そこに誰かがいて温かく迎えてくれるのとは対照的に、カトリック教会では話し相手になってくれる人が居ない。マルコスさんは言う。「私たちが教会に行くのは祈るためだけではありません。神父様に話したり、話を聞いたりしてもらう必要があるのです」そし



2009 年度 会計報告

2009 年 1 月 1 日～ 2009 年 12 月 31 日

収入の部		2009 年予算	2009 年決算	2010 年予算
教区より運営費		11,000,000	10,880,000	10,000,000
その他の収入	一般献金	6,850,000	8,029,608	8,287,000
	賛助会献金	1,500,000	1,288,000	1,000,000
	その他献金	0	156,536	60,000
	カリタスジャパン	0	2,310,000	-
	受取利息	20,000	10,717	10,000
	雑収入	0	265,423	-
収入合計		19,370,000	22,940,284	19,357,000

支出の部		2009 年予算	2009 年決算	2010 年予算
宣教司牧費		10,110,000	8,423,935	10,632,000
維持管理費		180,000	174,615	60,000
人件費（職員外給与）		180,000	60,000	-
事務運営費		8,900,000	6,548,432	8,665,000
その他の器具備品取得支出		0	367,500	-
支出合計		19,370,000	15,574,482	19,357,000

*今年度も皆様よりたくさんのご寄付を賜り、感謝申し上げます。

私の両親は

フィリピン人です。だから、私もフィリピン人ですが、千葉で生まれ育ちました。フィリピンに行ったことはありません。フィリピンのイメージは「夏!」というイメージです。フィリピンについて知っていることといえば、母親が作ってくれる食べ物やお菓子だけです。家族は、母と弟の3人暮らしで、父は私が3歳の頃オーバーステイで捕まり、フィリピンに強制送還され、その後、連絡はありません。入管に捕まって家族でバスに乗せられたこと、最後に父から抱っこされた後、別れたことを今でも覚えています。今、父はいませんが、母がいるのでさびしくはありません。

今の生活は、ビザが取れたことで色々なことが変わりました。今では日本人と同じ行政サービスも受けることができるようになり経済的にも安定しました。逃げないといけない、見つかったらどうしようなどドキドキしていたのですが、その不安がなくなり、今では安心して暮らすことができます。

小学校のときは先生とも仲が良くとても楽しかったです。名前が外国人の名前なので、みんなと同じ漢字の名前がいいなあと思ったこともありました。性格が明るくてスーパーハイテンションだったので、周りの友人から「浮いてる」と言われたり、「フィリピンからいつ来たの?日本語うまいね。」と言われ



たり(日本生まれ日本育ちなので…)、色がみんなより少し黒いことを指摘されて、私も白かったらよかったのにと感じたことがありました。中学では、色々あって登校拒否になった時期もありました。最近では、ちょっとしたことで気にしすぎてしまう自分がいるので、フィリピン人であることとかあまり意識しすぎないようにしています。

自分は、フィリピンの心もあるし日本の心もあると思っていて、どちらかひとつを選ぶということはできないけど、フィリピン人でもよかったことは、ことばや料理、ニュースの話題など、同じフィリピン人としか通じない話題で盛り上げられることでしょうか。同じフィリピン人の気持ちがわかるということでもあると思います。

将来は、専門的な知識と技術が習得できる高校に進学することができたので、そこで学んだことを生かして、コンピューター関連の仕事に就いて自立したいと思っています。

社会に訴えたいことは「外国人だから悪い」と決め付けないでほしいということですよ。外国人であってもみな同じではないと思います。日本人と同じように、よい人もいれば悪い人もいると思います。引越のため家を探すときに「外国人だからだめ」と言われたことがありました。

今まで、つらいこと大変なことがたくさんあったけど、今となっては、それはいい経験でした。そのときの経験があるからこそ、ビザがなかったり、不登校になっている人の不安や、つらい気持ちを持った人たちの気持ちがわかるし、同じ気持ちで接することができるからです。

(高校1年、女性)

私の人生は、おそらく誰の人生もそうであるように、とても色彩豊かです。1981年、私はクウェートに移民として受け入れられ、そこで働くことになりました。クウェートで労働のための契約書にサインするとすぐ、私は他の労働者たちと共にイラクにあるオフィスの本部に移送されました。イラクまではバスで27時間かかりました。途中、バスは銃撃のために何度か止まりました。当時私は26歳でしたが、何も恐くありませんでした。何事もどうにかなる、とっていました。それから数年後、私はエジプトへ渡り、ヒルトンホテルの30階にある外交官宅で家政婦として働きました。イラクでの経験とは全く違うものでした。

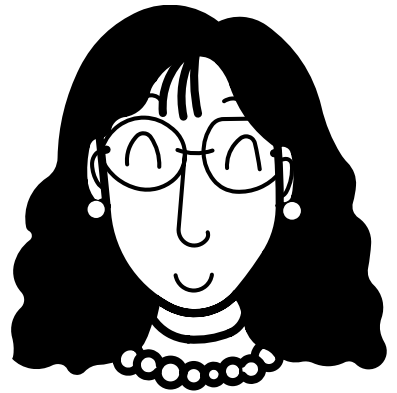
縁があって日本人と結婚することにな

りました。日本語は大きな障害でした。夫と私は、話すのにいつも辞書を使わねばなりませんでしたが、夫は私をととてもよく

支えてくれました。あらゆる機会を通じて日本語を習うように励ましてくれました。

私は教会の色々な活動に打ち込むことを始めました。小教区を越えての多くの団体に加わり、自分の家に人々を招いて歓迎しました。教会の人々と交わることによって、精神的に豊かになりました。

(50代、女性)



移住者たちの声

日本には、約21万人のフィリピン人が暮らしています。どのような思いで暮らしているのか、聞いてみました。



私のいまの気持ち表現するのは難しい。喜びと興奮と悲しみが入り交じっている。私は家に帰ることに決めたのだ。「家に帰る」と口にするたび、益々気持ちが高ぶってくる。

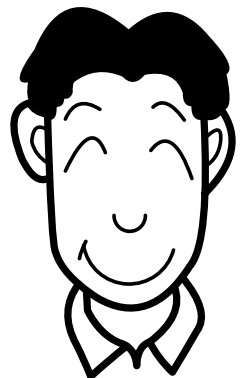
日本で暮らして10年。故郷の家族からは遠く離れて一人ぼっちの生活だった。

この国のためにどのような貢献をして来ただろうかと思いついてみる。建物を見るたびに自分に言い聞かせる。「私は、あのビルの柱をはじめて作った人たちの一人だった」と。ビルの建設現場で鋼鉄の骨組みとセメントの基礎を組み合わせる箇所まで長年働いてきた。

しかし、自分自身へのもっとも大きな問いかけは、「この10年間でしてきた家族への貢献は何か」ということである。子どもたちに、「私はどんなお父さんかね?」と聞いたら、彼らは多分「定期的にお金を送ってくれた人」としか答えな

いだろう。私は父親と呼べるような存在ではない。私は子どもたちの見知らぬ人である。私はそれだけの人にすぎないのだ。妻と子どもたちの側にいたい。離れるのは10年で充分だ。家族のもとへ帰る時が来たのだ。

(40代、男性)



難民支援緊急キャンペーンへのご協力ありがとうございました。

迫害から逃れ保護を求めて来たはずの日本でも、難民申請者は多くの「壁」に直面します。数年にわたる長い難民申請期間に、健康保険に入れず、生活保護も受けられず、また多くが働くことを認められていません。昨年4月には、そのような中で命綱ともいえる唯一の公的な生活支援金（保護費）さえも、突然打ち切られてしまう事態となりました。そこで、難民が、最低限でも「人」らしい生活を送れるよう、カトリック東京国際センター（CTIC）など国内の難民支援に携わる7団体は、「難民支援緊急キャンペーン」を行いました。

キャンペーンでは、「体を悪くし投薬治療もしている状態だが、家賃を払えず家を追い出された」、「子どものミルクが買えない」、「友人の家を転々としてきたが、皆数ヶ月失職し、もう頼れる場所がない」、「3日食べていない」など、困窮した372人の難民に、のべ854件の生活費支援を行うことができました。特に、カトリックの皆さんには多くのご寄付や家を失った難民のために教会を開放していただくなど、大きな大きなご支援をいただきました。難

民からの相談がひっきりなしに寄せられるため、「このままでは資金が尽き、彼らを再び路頭に迷わせてしまうかもしれない」といった不安も抱えながらの支援活動でしたが、そんなときにご寄付とともに添えられた皆さんのあたたかいメッセージが、私たちの心の支えにもなりました。本当に、皆さんのお力がなければ支援活動を継続できたかどうか分かりません。この場をお借りし、心より御礼申し上げます。

その一方で課題も残っています。保護費支給は再開されましたが、それまで3週間だった支給までの期間が通常でも数ヶ月かかるようになっており、「緊急生活支援」としての役割を果たしていません。難民の急増や長引く不況などにより、保護費予算が再び不足する可能性もあります。キャンペーン後もそういった事態に備え、困窮度の高い難民を支援するため、引き続きご寄付は募集しております。あわせて、申請期間中の生活保障を法律で定める等政府への働きかけにも取り組んでまいりたいと思いますので、引き続きご関心をお寄せくださいますようお願いいたします。





て、「私たちは信仰を強めたい。疑いがある時、正しい指示が頂きたい。問題がある時、苦しい時には慰めが欲しいのです。」と付け加えた。

もう一つマルコスさんが心配している問題がある。ティーンエイジャーの子どもたちが急速に成長し、それと共に母国語を忘れてゆく。そして両親とのコミュニケーションが薄れてゆく。自分の子どもたちがまだ若いのに学校に行かなくなり、悪い仲間に加わるのではないかと考えただけでも、不安でよく眠れなくなってくる。ティーンエイジャーたちが麻薬その他の恐ろしい悪事に巻き込まれる話をたくさん聞いている。事実、多くのブラジル人の子どもたちが助けを必要とし、親たちは仕事に忙しくてよくかまっていられない。仕事を減らしてもっと子どもにかまっていたとすれば、この国で、特にこの2年間の不況時に生きては行けない。労働システムが親たちを圧迫して生存のために働かせようとし、家庭をだめにしている。

経済的危機が子どもの居る家庭の生活に害を及ぼしている一方で、カトリック、プロテスタントを問わず、諸共同体にとっては、この事態は、弱者や貧困者についてのキリストの教えを実践に転換する色々な道の発見に助けとなった。ホームレスの人数が些

細であったことの原因である。

ラテンアメリカの移住者、特にブラジル人労働者の間では、宗教が自分の日常生活に融合されることは意味を持つ。彼らの祈りの集いで、参加者が自発的に発する共同祈願によって、生活の中での幸せな体験を強調することでわかる。ブラジル人にとっては日本のカトリック典礼に融通性が少なく、儀礼的な面が強調されて人間の温かみが足りないとして、物足りない感がある。カトリックを離れて他の宗派に加わるのも無理はない。

信仰共同体についてと同様に日本の家庭生活のスタイルもまた、話し相手のマルコスさんの心配事の一つである。彼は言う。「もし私の家庭の内部的絆が弱くなり、信仰共同体が子どもたちに意味を持たないなら、彼らの人生は空虚さだらけになるのではないだろうか、と心配なのです。」

物理的な、そして人間的な空間として、教会は日本に居るブラジル人移住者たちの上に太陽を輝かせることができる。

